

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和元年6月17日現在

機関番号：32675

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2017～2018

課題番号：17H07152

研究課題名(和文) 京都学派の行為論における創造と倫理：予測・制御不可能性としての「自然」に着目して

研究課題名(英文) Creation and Ethics in Theories of Action of the Kyoto School: "Nature" as Unpredictability and Uncontrollability

研究代表者

犬塚 悠 (INUTSUKA, Yu)

法政大学・国際日本学研究所・研究員

研究者番号：80803626

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,300,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、近代日本哲学を手掛かりとして「人間」「自然」を再考するものである。本研究が明らかにしたことは主に以下の3点である。(1)和辻哲郎の倫理学に見られるように、個人的かつ社会的な存在である人間は、環境を自己の一部とし、社会の形の再現を善とする存在である。対して(2)西田幾多郎は進化論的な観点から人間の根底には創造的な世界があるとし、この世界の創造活動に参加することを善とした。個を通して既存の社会の形の反復を壊すこの予測・制御不可能な根底を、我々は改めて「自然」と呼ぶことができる。(3)最終的に、三木清の哲学から、和辻の人間・倫理と西田の自然・創造とは本質的に相克することが見出される。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、今日の環境倫理学や技術倫理学の議論に、日本思想から一視座を提供するものである。人間個人を主体とする近代倫理学に対し、今日の環境倫理学や技術倫理学は、環境を倫理の中に位置づけることは可能か、行為の主体は人間個人には限られないのではないかという問題を提起してきた。和辻・西田・三木らの哲学は、人間・環境複合体を主体とし、その形の維持・革新を善とする。この考えは、環境問題を人間と人間の外部としての自然との対立の問題として見るのではなく、人間・環境複合体としての社会の形を維持することとしての倫理と、革新への衝動をかなえることとしての創造との相克の問題として考察することを可能にするものである。

研究成果の概要(英文)：The aim of this research is to reconsider the concepts of "human" and "nature" through an examination of modern Japanese philosophy. This research revealed three main points: first, based on Watsuji Tetsuro's ethics, human beings are involved in both an individual and a social existence, in which their environment is an integral part. Watsuji's ethics consider reproduction of social forms essential. Second, Nishida Kitaro, in contrast to Watsuji, from the perspective of evolution theory, thinks that the creative world lies at our foundation and that the good lies in taking part in the creation of this world. We can rename this unpredictable and uncontrollable foundation as "nature," which destroys the repetition of existing social forms through individuals. Finally, Miki Kiyoshi's philosophy contends that the human ethics shown in Watsuji and the natural creation shown in Nishida are fundamentally in conflict with each other.

研究分野：近代日本思想、環境倫理学

キーワード：和辻哲郎 西田幾多郎 三木清 京都学派 自然 主体 環境 技術

## 1. 研究開始当初の背景

自然環境破壊が問題とされる中、「人間」と「自然」両概念の根本的な再考が求められている。近年の環境倫理学や技術倫理学においては、これまで人間のものとされてきた倫理学の中に環境を配慮の対象として位置づけることは可能か、また行為の主体は人間個人ではなく身体外の物との複合体ではないかという問題が論じられてきた。他方で、京都学派の哲学は、個人と自然環境・社会とのかかわりを論じたものとして近年国際的に注目されている。本研究の研究代表者はこれまで、オギュスタン・ベルクや和辻哲郎の倫理学を手がかりとして、「人間」対「人間の外部としての自然環境」という従来の図式に代わる「環境を内包する人間存在」の新たな倫理学を論じており、国際的な評価も受けてきた。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は、既存の人間・環境複合体の維持を重視する和辻の不足点を補う形で「自然」を再定義し、これまでの成果を発展させることにある。和辻は、個人的・社会的な人間存在は身体外の物も自己の中味とするものであり、人間の外部としての「自然」や「環境」は本来存在しないと見た。その和辻の倫理学において、善は信頼に応えること、すなわち人間関係・社会の形を再生することとされる。しかし他方で、我々の意志を超えて生じる情動や物理現象は、既存の社会構造を内部から破壊しうるものである。改めて我々の内の「自然」と呼びうる予測・制御不可能なこれらは、芸術を含む制作行為を通じた人間の自己形成に不可欠な契機であるといえる。

本研究は、和辻と影響・批判し合う関係にあった西田幾多郎・三木清ら京都学派の哲学を手がかりに、最終的に我々の行為の自然性と社会性、創造と倫理との関係を考察するものである。

## 3. 研究の方法

本研究は、西田幾多郎・三木清ら京都学派の行為論に見られる予想・制御不可能性としての自然に着目し、我々の行為の自然性と社会性、創造と倫理との相克を明らかにするために、主に次の2点の方法において研究を進めた。

### (1) 西田幾多郎の行為論における「自然」= 予測・制御不可能性の分析 (平成 29 年度)

和辻倫理学における人間・環境論の分析の精緻化を進めると共に、それと比較する形で西田哲学に見られる予測・制御不可能性としての「自然」の解明を行った。特に、その自然と我々の自己形成との関係に着目した。当初、後期西田哲学の行為論に分析を絞って研究する計画であったが、彼の初期の哲学から一貫してこの「自然」への着目があることが研究を進める中で判明したため、実際には初期の「グリーン氏倫理哲学の大意」(1895)から遺稿「場所的論理と宗教的世界観」(遺稿, 1946年『哲学論文集第七』所収)まで通して分析を行った。また、2月には南山大学南山宗教文化研究所に2週間滞在し、資料収集と同研究所の研究者との意見交換を行った。

### (2) 京都学派の行為論における自然性と社会性との相克の分析 (平成 30 年度)

三木清の哲学を和辻と西田の哲学を一つの体系に含めるものとして位置づけ、その行為論における自然性と社会性、創造と倫理との相克の解明を進めた。その中で、彼らの哲学の差異は彼らの「主体」概念の差異に基礎づけられることが判明したため、「主体」概念について再度和辻・西田の哲学、加えて西田と相互影響関係にある田辺元のテキストを分析した。さらに本研究で得られた知見の意義を示すため、行為者を人間身体と環境との複合体に認める近年の議論との比較を行った。

## 4. 研究成果

平成 29 年度は、主に和辻哲郎と西田幾多郎における行為論・自然論の比較考察を行った。その結果、(1) 和辻倫理学における人間存在の一部としての自然・風土は反復性を持ち、その反復性が社会的行為や信頼関係の倫理の基礎となっていること、それに対して(2) 西田哲学における自然は予測不可能な仕方では我々の身体を通して現れるものであり、それが芸術を含む創造行為につながっていることが見出された。

(1) に関しては、和辻の先行研究として重要なフランスのオギュスタン・ベルク氏の風土論との比較も併せて論文としてまとめ、風土論・環世界論をテーマとした仏語書籍の一章として出版された(下記、図書)。ベルクは、和辻の「風土」を *climate* (フランス語では *climat*) ではなく *milieu* という概念において翻訳し、主観にも客観にも還元されえない当概念の環世界的特徴を重視している。ベルクの解釈は現在フランス語圏内外の和辻研究に影響を与えるものであるが、*milieu* という比較的静的な概念において捉えたために、「風土」の動的な、より厳密には「反復的」な特徴が見えなくなってしまった。だが、和辻の風土論においてこの風土の

現象の反復性は、世代を超えた「自己了解の仕方」(家・着物といったものを含む生活様式)の形成のために不可欠な性質である。更に、この反復性は和辻の風土論のみならず、彼の倫理学においても重要である。なぜならば、人間存在を「行為的連関」として解釈する和辻の倫理学において、個々人の「行為」は既存の間柄の再現を目がけるものとされ、また「善悪」というものは「信頼」に応えるか否か、すなわち共通の過去に基づいた未来の行為への期待に応えるか否かであると位置づけられるためである。和辻が「帰來の運動」と呼ぶこの反復運動の中で、環境は主体的な「行為的連関」を個人の身体と同様客体的に表現するものとして、その運動の重要な一端を担っている。換言すれば、家族による朝食の行為が「朝」の「食卓」と不可分であるように、環境は我々の日常的な行為、善の現象を形成する重要な要素となっているといえる。このように、行為的連関としての人間存在には本来「外界」としての「環境」は無いと述べる和辻の倫理学は、ベルクが過去に試みた「エクメーネ(人類の住処としての大地)」の倫理学に貢献するものである。

(2)に関しては、11月にパリのフランス国立東洋言語文化学院にて開催された European Network of Japanese Philosophy の大会にて口頭発表を行った(下記、学会発表)。前述のように自然の反復性と調和した人間社会のリズムを語る和辻に対して、西田が問題とするのは人間・自然が既存の在り方を否定し変化するものであるという点である。この西田の関心は初期から後期まで見られ、例えば『善の研究』(1911)において「善」とは内なる要求を満足させることであり、この要求は自然・宇宙から生じるものであるとされた。我々は現実にはない理想を実現することによって、宇宙の発展に参加する。しばしば忘我の境地における芸術的創作を例として西田が論じるこの創造活動は、その後の彼の著作において「宇宙的衝動」や「天の技術」といった語においても現されるように、我々の予想・意識的制御を超えた基礎をもつものである。本発表においては、次年度に本格的に取り組んだ三木の哲学における倫理と創造との相克についても言及した。

また、2月の南山大学南山宗教文化研究所における滞在では、西田幾多郎に加え、当初の計画において検討不足であった田辺元について本研究課題に関連する資料や知見を得ることができた。

平成30年度は、まず和辻哲郎と三木清における自然論の比較考察を行った。その結果、(1)和辻と三木における「自然」概念の相違の根底には彼らの「主体」概念の相違があること、(2)これらが彼らの倫理學理論の相違と結びついていることが明らかになった。

(1)に関しては、近代日本哲学における「主観」「主体」概念の形成史とも併せて、8月に北京の China National Convention Center で開催された 24th World Congress of Philosophy にて口頭発表を行った(下記、学会発表)。「主観」「主体」概念の形成史については、小林敏明による『主体のゆくえ 日本近代思想史への一視角』(講談社、2010)という先行研究がある。同書においては「主体」概念の形成における三木清のマルクス主義研究の影響が主に論じられ、その影響下に和辻の主体論も位置づけられているのに対し、本発表では和辻が三木とは別にカント、ディルタイ、仏教哲学の研究から独自の「主体」概念を得ていたことを述べた。これらは和辻と三木における主体概念の差異にもつながっている。和辻が「主体」は人間存在であるとして、その主体の客体化・表現の内に自然も含めているのに対し、三木において「主体」は、「主体的な意味における自然」や「世界は絶対的に主体的なもの」という語に表されるように、人間を超えたものとして考えられる。三木は「自然の技術」に基づいた人間の「技術」を考察し、社会の変化も自然の変化と連続しているものとして位置づけた。本発表では、以上の彼らの議論は、ブリュノ・ラトゥールのように「主体性」を人間個人に限らず拡大して解釈する現代の議論に通用するものであることを示した。

(2)に関しては、9月にドイツのヒルデスハイム大学にて開催された European Network of Japanese Philosophy の大会にて口頭発表を行った(下記、学会発表)。前述のように、反復性を基盤とする和辻の倫理学には、社会の変化についての考察が薄いという問題がある。三木清は、彼の多くの著作において、この和辻倫理学の問題点を(和辻の名前を挙げてはいないが)指摘している。三木はベルクソンの言葉を援用し、和辻のいうような「間柄」を中心とした倫理学は「閉じた社会」のものであり、超世間的な人格間の「開かれた社会」のものではない。前者においては主体が客体と有機的な調和においてあるが、いずれ主体が客体を超越し、非連続的關係に立たざるを得ないときが訪れる。すなわち社会における矛盾が激化し「危機的時期」が訪れ、この時、超世間的な「人間的倫理」が必要とされる。この変化の要因を、創造的な「超知性のパトス」や「デモーニッシュ」といった語において、個人の意識の奥底から個を揺り動かすものとする三木の主張は、前述の西田と共通する。が、三木の哲学は更に、(和辻が描いたような)倫理と(西田が描いたような)創造とが相克關係にあること、創造が倫理を否定し人間社会に「悲劇」をもたらすものであることを指摘する点で、和辻・西田の議論に総合的な視座を与えるものである。以上を明らかにした上で本発表は、自然環境との調和の必要性を主張する今日の環境保護運動は、人間の倫理を否定するものではなく、むしろ創造に対する倫理の抵抗として位置づけられると論じた。

上記に加え、前年度から進めていた和辻と西田の比較考察についても、「主体」概念に注目することによって彼らの哲学の相違が明確になることが判明した。特に10月に実施した関西大学図書館所蔵の西田自筆原稿「実践と対象認識」の調査によって、西田の「主体」の定義が「環境」概念との関係において変化していく様子が明らかになった。以上の内容については現在論

文を準備中である。

## 5 . 主な発表論文等

〔学会発表〕(計3件)

INUTSUKA Yu, In between Open and Closed Societies: Bergson, Watsuji and Miki (Panel: Philosophy in Transition: Watsuji Tetsurō and the Social Sciences), the 4th European Network of Japanese Philosophy Conference, University of Hildesheim, Hildesheim, Germany, 2018年9月6日

INUTSUKA Yu, *Shutai* or Embodied Subject in Modern Japan: Miki Kiyoshi and Watsuji Tetsurō (Panel: Considering bodily boundaries from comparative perspectives in the philosophy of body and mind), the 24th World Congress of Philosophy, China National Convention Center, Beijing, China, 2018年8月15日

INUTSUKA Yu, Watsuji and Nishida on the Predictability of Nature, the 3rd European Network of Japanese Philosophy Conference, Institut national des langues et civilisations orientales, Paris, France, 2017年11月3日

〔図書〕(計1件)

*La mésologie, un autre paradigme pour l'anthropocène ?*, dir. Marie Augendre, Jean-Pierre Llored, Yann Nussaume (担当範囲: INUTSUKA Yu, Chapitre IV : Le *fūdo* et l'éthique de Watsuji Tetsurō : pour l'avenir de l'écoumène, pp. 85–92), Paris: Hermann, 2018年4月

〔その他〕

ホームページ等

Researchmap

<https://researchmap.jp/yuinutsuka/>

## 6 . 研究組織

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。